

情動喚起により認知運動課題を円滑に行えた半側空間無視患者 - 左側の外空間と身体空間を認識して行為をするために -

○沖田 学^{1,2)} 久岡 由依²⁾ 森岡 啓太²⁾ 加藤 大策^{1,2)}

1) 愛宕病院 脳神経センター ニューロリハビリテーション部門

2) 愛宕病院 リハビリテーション部

【はじめに】

情動的注意は分化しているため半側空間無視 (USN) 患者でも左側の情動情報を検出できる (Domínguez-Borràs, 2012)。また、過去の情動の影響は自伝的記憶に限定される (森, 2011) ため患者固有の来歴の応用が期待される。今回、課題中に集中できないUSN患者に情動を応用して認知運動課題を実施した結果、有効性と限界が認められたので報告する。

【症例紹介】

症例は右MCA領域梗塞でUSNと左麻痺 (Br. stage上肢IV下肢V) を呈し4ヶ月が経過した70歳代女性である。趣味は歌と社交ダンス、宴会であった。課題時に抑鬱状態や緩慢さを認めた。MMSEは24点で、各種検査で軽度USN (主に遠位空間) を認め、全般性注意障害が顕著であった。特に動作時にUSNを認めた。視線分析では赤ちゃんの写真で発動性が向上し、「昔、社交ダンスで好きな人と踊った」とstepをリズムカルに行い情動喚起の影響が認められた。ADLは歩行見守りレベルであった。

【病態解釈と治療課題】

注意ネットワークの破綻により左空間が狭小化し、特に前頭葉機能の影響で症状の増減を表した。そのため、善い情動喚起により精神身体活動が活性化した (Aramaki, 2016) と考えられた。このことから情動を考慮した治療課題を退院までの約1ヶ月間実施した。体性感覚情報を基に両側の比較と外部座標へ到達する空間課題を上下肢に実施した。上肢では郷土料理や子供等の写真を用い、下肢ではマンボのstepを想起してから実施した。さらに、レーザーポインターを照射し反応してもらう受動的注意課題も実施した。

【結果】

情動を利用すると左空間への探索が拡大した。情動利用による下肢課題の効果を10m歩行能力で確認すると差を認めなかった。しかし、初期では「調子悪いから行かんよ」と拒否だったが「リズムでは姿勢がよくなり気分がよい」と姿勢を修正し積極的に課題を実施した。改善した項目はBITで左側誤りが減少し、CBS自己:他者評価は1:7→2:2とUSN症状は軽減したが遠位空間の無視は残存した。

【考察】

発動性が向上して積極的に取り組むことができていたが、運動学習の促進には至らなかった。なぜなら、今回の情動利用は課題内容の知覚仮説では無く、学習契機の情動利用と考えられるからだと推察した。

【倫理的配慮 説明と同意】

発表とビデオ撮影について説明し同意を得た。